

先日、静岡市内をぶらぶらと歩いていたら、駅前の松坂屋の近くでビル工事をしていました。工事の案内図を見ると、多くのフロアに学校が入ると書いてあった。駅前立地ということなので、専門学校あるいは大学のサテライトオフィスが入るのだろう。

この工事の光景を見ながら、10年以上前に話題になった都市と教育の関わりについての議論を思い出していた。当時、東京都23区の中には40万人を超える大学生が、京都市内には15万人ほどの大学生がいた。しかし大阪市内には2万人程度しか大学生はいなかったという数字が論議されていた。

記憶から引き出したアバウトな数字であるので正確ではないが、要するに東京や京都には多くの学生が住んでいるが、大阪には少ないということだ。これが、当時の大阪の街と

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

## 論壇

しての活力を失わせると考えられていたのだ。

戦後を通して、大阪市は工場や大工場を郊外に移すのは騒音問題など理由があるが、大学を郊外に移すのは広い静かな環境でじっくり勉強してほしいという思いがあったのかもしれない。こうした政策が結果として、大阪の街から活力を失わせる結

### 学校で都市活性化を

果となった。街の中心部から若者の姿が消えればそれだけ街の活力が失われる。

学生にとっても郊外に行くのが好ましいことなのか分からない。東京では郊外の八王子などにキャンパスを移転した大学の人気は落ちており、四谷(上智大)や三田(慶応大)や神田(明治大)など都心のキャン

パスを守った大学の方が人気が高くなっている。一時は郊外に出ていった大学も、都心に戻る傾向を示している。

ここでは大学の話を書いたが、専門学校でも状況は同じだろう。それどころか郊外に立地する専門学校などあまり聞いたことがない。大学生以上に専門学校生にとって、街の中心の立地が便利であることは明らか

だ。

地域の将来は若者がつくっていくものである。都市化が進んでいく中で、中心部に若者が集まらないような街に未来はない。地域活性化のためには、街の中心部に多くの若者が集まるような工夫が必要だろう。大学や専門学校などを街の中心に位置させるというのは非常に有効な方法

である。多くの若者が毎日そこに通い、彼らの生活の場としてその周辺にぎわいが出てくる。店の顧客としてだけでなく、彼らにとってのアルバイトの場としてもにぎわいのある街中の方が有利であるはずだ。

人口減少の時代には、少ない人口をいかに街の中心に集めるのかという、コンパクトシティの視点が重要となる。若者に限らず多くの人にとって、街の中の徒歩圏で生活することが望まれる。高齢者にとっても便利のよい街の中に住む方が良い面が多い。気候変動への対応という意味でもコンパクトな街は好ましい。ただ、そうした街づくりには時間がかかる。そこで短時間に人の流れを変え、起爆剤が必要となる。大学のサテライトや専門学校などを街の中心にもつてくるのは効果的な起爆剤になるはずだ。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。